

何が聞こえているのか

——音の存在論について——

けんか
源河 亨

はじめに

音や聴覚に関する標準的な科学では、われわれが聞き、意識に現れる音は、空気や水などの媒質中を移動し耳に到達した音波であると言われている。本稿はこのような標準的な見解に反対し、音は音源となっている出来事であると主張する。

音は音波であると主張する立場は Wave-based account や Proximal Theory と呼ばれ、音は音源であると主張する立場は Source-based account や Distal Theory と呼ばれているが、本稿では前者を音波説、後者を音源説と呼ぶことにする。また本稿は、「皿が地面に落ちた」「車が走っている」ときのような比較的単純な音が、正しく知覚されている場面を扱う。音楽や発話における音、錯覚や幻覚における聴覚現象などの複雑な事例は、紙面の都合上本稿では扱えない。さらに本稿は、意識に現れる音は実在するものであると仮定し、音は主観的な感覚にすぎないと考える主観主義は扱わない。

本稿の構成を述べておこう。まず、音波説と音源説がどのように対立しているかを見る(1)。次に、音波説の理論的根拠は十分ではないことを明らかにし、さらに、音波説それ自体に問題があることを明らかにする(2)。そして、音源説の根拠と利点を明らかにする(3)。

1 音についての二つの理論

物体にエネルギーが加えられ振動すると、その振動は圧力変化のパターンと